

学習指導要領との関連から—「社会科」「家庭科」「総合的な学習」

学習指導要領の関連部分抜粋と本部の項目タイトル

社会科	目標	<p>(2) 社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考える力，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力，考えたことや選択・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。</p> <p>(3) 社会的事象について，主体的に学習の問題を解決しようとする態度や，よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに，多角的な思考や理解を通して，我が国の歴史や伝統を大切にして国を愛する心情，我が国の将来を担う国民としての自覚や平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きることの大切さについての自覚を養う。</p>
	内容	(ク) 歌舞伎や浮世絵，国学や蘭学 ^{らんがく} を手掛かりに，町人の文化が栄え新しい学問がおこったことを理解する。
家庭科	目標	<p>(1) 家族や家庭，衣食住，消費や環境などについて，日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに，それらに係る技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し，様々な解決方法を考え，実践を評価・改善し，考えたことを表現するなど，課題を解決する力を養う。</p> <p>(3) 家庭生活を大切にする心情を育み，家族や地域の人々との関わりを考え，家族の一員として，生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。</p>
総合的な学習	目標	<p>(1) 探究的な学習の過程において，課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け，課題に関わる概念を形成し，探究的な学習のよさを理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし，自分で課題を立て，情報を集め，整理・分析して，まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに，互いのよさを生かしながら，積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>
項目タイトル		<ul style="list-style-type: none"> ● 学習内容(1) 江戸時代の暮らしとリサイクル P.28 ~ 29 ● 学習内容(2) まちにあるごみのいろいろ P.30 ● 学習内容(3) 資源回収の仕組み P.31 ● 学習内容(4) 容器包装のリサイクル P.32 ● 学校実践事例 学年に応じた個々の美化活動がふるさとの豊かな景観を守る P.33 ● 学校実践事例 地域で励む資源回収や清掃活動が地球規模で考える素地を養う P.34

江戸時代の暮らしとリサイクル

ねらい

- 日本の歴史の中で江戸時代の位置付けを知る。
- 身分制度を踏まえて町と人々の暮らしを知る。
- 江戸時代の循環型社会の成立を知る。

食料、衣料、燃料など、生活を支える物資が貴重であった江戸時代。人々は物を大切に使い、そのために様々なリサイクルを行っていました。当時のごみ処理事情を理解しましょう。

江戸時代の社会と身分制度

江戸時代は、人々は生まれながら、それぞれの「身分」によって分けられていました。身分は固定され、親から子へと継承され、これを変更することはほとんど許されませんでした。職業もまた、身分と強い結びつきをもっていました。

世の中を支配するのは武士で、苗字を名乗り、刀を差すなどの特権をもっていました。その下に、農民など村に住む人々（百姓）、町に住む町人（職人や商人）がおり、年貢などを通じて武士を支えていました。さらに、百姓や町人と区別される人々もいました。彼らは人々の生活に必要な用具を作り、芸能を盛んにして文化にも貢献していたにも関わらず、ほかの身分の人々との交際を制限され、差別を受けていました。

江戸時代の「循環型社会」の工夫

こうした身分制度の束縛はありましたが、幕府の安定した統治が続くなかで人口の増加が進み、江戸時代末期には、全国の人口は約3,200万人にまでなりました。そのうち84%が百姓、武士が7%、町人が6%でした。江戸の人口は100万人にもなり、世界一大きな都市でした。

町にはいろいろな職業の人が行きかい、また、新しい文化と学問も生まれてきました。しかし、こうした都市の規模の拡大や生活の変化によって、エネルギーや資源、そして「ごみ処理」が問題になってきました。これに対して、江戸時代の人々は、今日の「3R」に取り組み、循環型社会を作る様々な工夫を生み出していました。

江戸時代のごみ処理制度

「江戸時代」と言っても300年近く続きます。人口も増え都市化も進んで、生活も変わり、「ごみ処理」が大きな問題となってきました。

●江戸時代のごみ処理の移り変わり

①家の庭に埋める。空き地に埋める。川や堀に埋める。

②正方形の街区の中央に「かいしょち会所地」という空き地があり、ごみ投棄場として使っていた。付近の住民から悪臭やカ、ハエの苦情が出始めた。

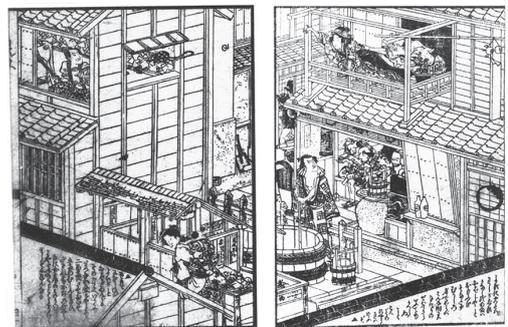
③「会所地」へのごみ投棄を禁止。

④深川永代浦(今の東京都江東区)をごみ投棄場に指定。いままではただ単に「ごみ捨て禁止」をするだけだったが、初めてごみ処分場所を決めたという画期的な出来事だった。後に、深川越中島に変更された。

⑤「うきあかたしやうざいくみあい浮芥定湊組合」という幕府が許可したごみ運搬業者の組合が誕生。庶民の出すごみは、芥改役(あくたあらためやく:不法投棄の取り締まり)や芥取請負人(運搬人)が公認され、それ以外の処分を禁止、船で処分場まで運ばれた。



運搬途中、肥料芥・金物芥・燃料芥などとして利用できるものは選び出して農家、鍛冶屋、湯屋に売っていた。



「江戸のごみ捨てのようす」(歳男金時時) 国立国会図書館蔵

コラム—江戸のリサイクル業者たち

江戸時代には、下駄や瀬戸物から紙くずまで、様々なものを徹底的にリデュース、リユース、リサイクルするシステムが成立しており、それを担う様々な職業の人々が存在していました。どんな人々がいたのか、ちょっと覗いてみましょう。

職商人

江戸時代独特の品物を修理するのが本職の職人ですが、必要に応じて新品の販売や中古品の下取りも行いました。職人であると同時に商人である人々です。

- 張替え屋 提灯の紙や傘の紙の張替えをします。
- 算盤屋 調子の悪くなった算盤を直すとともに新しい算盤も売っていました。
- 羅お屋 キセルの修理をします。

修理・再生専門業者

こちらは、壊れて使えなくなったものを修理して使えるようにする専門の職人です。

- 鑄かけ屋 古い鍋や釜、燭台が折れてしまったものなどを直します。金属の溶接などの特殊な技術を持っていました。
- 焼き接ぎ屋 割れた瀬戸物の修理。白玉粉で接着し加

熱して直します。

- 下駄の歯入れ屋 早くすり減ってしまう下駄の歯の部分げたを、新しいものに入れ替えます。
- 箍屋 樽や桶の箍を直す仕事です。
- 研ぎ屋 包丁など刃物を研ぐ仕事です。

回収専門業者

不用品を買い集め、専門の間屋などに販売する業者です。買い取りだけでなく、交換、下取り、落ちているものを拾う仕事の人もいました。

- 下肥回収業者 人の排泄物を回収して農村へ持ち込み、肥料として販売しました。
- 紙くず回収業者 古紙を買い取り、漉き直して再利用しました。
- 灰回収業者 かまどなどから出る灰を回収します。灰は肥料になり、また酒造や製紙、染色にも利用されました。
- 古着回収業者 古くなった着物を買い取り、欲しい人に売りました。
- 古傘回収業者 傘の紙張替えの専門職人のほかに、傘から取った油紙を包装用に売ることもありました。

【参考図書】「大江戸リサイクル事情」石川英輔（講談社文庫）

調べ学習

江戸庶民の生活とごみ処理の状況を調べてみましょう。

手順

- ①人口とごみ量の変化を調べます。
- ②庶民の衣・食・住を調べます。
- ③どんなごみがあったか調べます。

展開

身の回りの「リサイクル」について、今と昔を話し合い、今に生かせることはないか考えましょう。

まちにあるごみのいろいろ

ねらい

- 公共空間にあるごみ箱の存在に気づく。
- ごみ箱からリサイクルボックスへの転換の意味を理解する。

ふだんあまり意識をしないけれど、まちの美化に大きな役割を果たしている「ごみ箱」。その変化には「3R」への取り組みが表れています。

「まち美化」とごみ箱の役割

ふだん、私たちはまちのあちこちに置かれたごみ箱にあまり気をとめません。しかし、外出先で飲んだり食べたりして、出たごみなどを処理するときは、必要になります。みんなの公共財産である「まち」を清潔に保つうえて、ごみ箱は地味だけれど大きな役割を担っているのです。

まちのごみ箱は、市町村が設置・管理するものや、商店会や特定のお店で管理しているものがあります。きちんと管理されていない場合、ごみ箱周辺がかえって汚くなってしまうことも、よく見かける光景です。

ごみ箱から「リサイクルボックス」へ

ごみを資源として位置付ける考え方が広がり、「ごみ箱」は分別の機能を持ち、再資源化の入り口となる「リサイクルボックス」へと転換してきました。スーパーマーケットのリサイクルコーナーに置かれた食品トレイなどのリサイクルボックスはもちろんですが、コンビニエンスストアでも「もえるごみ」「缶・びん」「PETボトル」などの分別型リサイクルボックスが置かれています。駅や街角の自動販売機の横には飲み終えた容器のリサイクルボックスがあります。

リサイクルボックスの進化

再資源化の入り口としての機能を低下させるのが、弁当容器や菓子袋などの異物の混入です。飲料業界団体の調査によれば、自動販売機横のボックスについて、「ゴミ箱ではなく、飲料容器専用のリサイクルボックスであることを知らなかった」は約40%でした。

異物混入の低減のため、ボックスの形・デザインや啓発メッセージの表示の仕方などの工夫が重ねられています。



【清涼飲料業界統一仕様の自販機横リサイクルボックス】

2022年9月発表。リサイクルの支障となる異物の抑止、「脱ゴミ箱化」を目的として、投入口を下向きにするほか、特大の啓発スペース、オレンジのカラーを採用。業界統一仕様として、異物混入が多い屋外を優先に順次設置されています。

(写真提供) 一般社団法人全国清涼飲料連合会、一般社団法人日本自動販売協会

コラム

リサイクルボックスに関する消費者意識

- 「普段、街中でペットボトルや缶以外のゴミが出た場合、どこに捨てることが多い？」最多は「自動販売機の横にあるボックス」53%
- 40%強が「自動販売機の横のボックスはゴミ箱ではなく、飲料容器専用のリサイクルボックスであることを知らなかった」と回答
- 自動販売機の横のボックスにペットボトル・缶・ビン以外のゴミを入れた理由「捨てる場所がなかった」という回答が多数、そのほか「ポイ捨てよりはましだと思った」「飲料の容器であれば何でもいと思った」「他のゴミも入っていた」など

(資料) 全国清涼飲料連合会「リサイクルボックスに関する消費者意識調査2020」(調査概要)2020年9月25日～9月30日の6日間、一都三県の15歳～59歳の男女で、月に1日以上飲料の自動販売機を利用する人1,000名の調査結果を集計

調べ学習

まちのごみ箱リストを作ってみましょう。

手順

- ① コンビニエンスストア、商店街、公園などにある回収ボックスのマップを作ります。
- ② その形状（リサイクルボックスか否かなど）、状態（きれいに使われている、壊れていて使えないなど）、使い方のルール（コンビニエンスストアでは「持ち込まないで」と書いてあるなど）を一覧表に書き込みます。
- ③ まちのリサイクルボックスやごみ箱は、どのような意図をもって設置されているか話し合みましょう。

資源回収の仕組み

ねらい

- 資源回収の種類と仕組みを理解する。
- 様々なものが再び資源となることを理解する。

資源を回収する方法には、集団回収、分別回収、拠点回収、店頭回収の四つがあり、それぞれ誰が担うのが異なります。

集団回収

民間の資源回収業者と住民などの間で行われる回収のことです。町会や自治会などの住民団体が資源を集めて、業者がそれを買上げるもので、主に古紙とアルミ缶が対象となります。資源価格が変動するため、市町村によっては業者や団体に補助金や委託料を払っている場合があります。



分別回収

市町村が行うごみ収集と処理事業。住民は回収日時、場所、品目、排出方法などのルールに沿って資源ごみを出します。収集後、市町村がリサイクルセンター等で再資源化処理を行い資源化するこ

ともあります。収集から選別、資源の売却まで資源回収業者に一括委託している場合もあります。



拠点回収

住民が回収の拠点まで持ってくる方法。市町村の施設や特設された場所に持ち寄る形で回収が行われます。公共施設に置かれている乾電池や牛乳パックの回収ポスト、一部の団地などに置かれている空きびんポスト、空き缶回収機などがこれに当たります。



店頭回収

スーパーマーケットやコンビニエンスストアなどが店頭でリサイクルボックスを置いて行うもの。多くのスーパーマーケットのチェーン店で、牛乳パック、食品トレイ、PETボトル、アルミ缶の回収が行われていますが、店によって回収方法や回収する品目が異なります。



調べ学習

実際の資源回収がどのように行われているか調べてみましょう。

手順

- ①回収場所を調べます。
 - 集団回収…PTAや老人会、役所に聞きます。
 - 分別収集…役所などで聞きます。
 - 拠点回収…近くの公共施設に行ってみます。
 - 店頭回収…スーパーマーケットやコンビニエンスストア（牛乳パックなど）、電器店（乾電池）に聞きます。
- ②回収品目と回収の方法を調べます。回収場所をまわって回収の状況について聞きます。
※リサイクルの状況については、役所の担当部署（「リサイクル推進課」など）があるので、そこで聞くことができます。
- ③どのようにリサイクルされているか聞きます。

容器包装のリサイクル

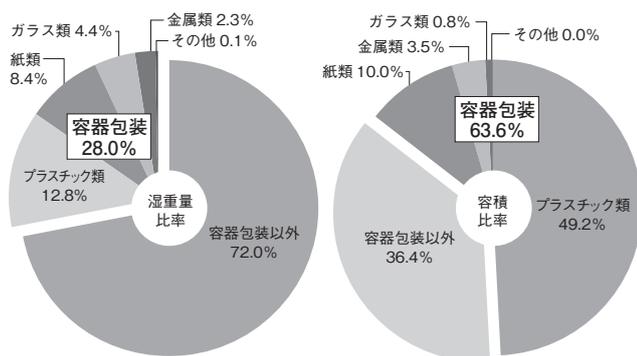
ねらい

- 容積比では家庭ごみの約60%を容器包装が占めていることを理解する。
- 容器包装のリサイクルのために消費者の協力が必要であることを理解する。

家庭ごみの大部分が容器包装

レジ袋、食材を包むラップフィルム、コンビニエンスストアの弁当容器、そして缶、びん、PETボトルと、私たちの暮らしには容器包装がたくさんあります。その結果、容積比では、家庭から出るごみの約60%を容器包装が占めています。

●家庭ごみに占める容器包装廃棄物の割合(令和5年度)



(資料) 容器包装廃棄物の使用・排出実態調査(環境省)
 (注)「湿重量」は、水分を含んだ重量。対義語は「乾燥重量」。

法制化された容器包装リサイクル法

1995年当時、市町村の一般廃棄物最終処分場があと8.5年で一杯になってしまう状況でした。このため、一般廃棄物の減量と埋立地の延命化の目的で、残余年数を考える上で重要な容積比に占める割合が大き

い容器包装ごみを埋め立てずにリサイクルすることになり、同年、「容器包装リサイクル法」(容リ法)が制定されました。

そして、1997年に、まずスチール製やアルミ製の容器、飲料用紙パック、ガラス製の容器(色により三分別)、PETボトルの5品目を分別収集の対象とし、このうち有償で引き取られているスチール製及びアルミ製容器、飲料用紙パックを除いて事業者(包装容器のメーカーと、中に入っている飲み物等のメーカーの双方)にリサイクルの実施義務が課されました。

次に2000年には、上記のもの以外のプラスチック容器包装、紙製の容器包装、ダンボールも分別収集の品目に加えられ、このうち、ダンボールを除いて事業者にリサイクルの実施義務が課されました。なお、竹、陶器、木製その他の素材の容器包装は分別収集の対象外とされています。

容リ法施行後、PETボトルの回収率は上昇し2023年には92.5%に達しています。これはアメリカ(28.6% 2021年)やヨーロッパ(56.8% 2021年)よりも高い率です。容器包装の量自体を減らす取り組みも進んでいます。

容リ法は、事業者のリサイクル義務だけでなく、市町村に対しては法的な基準に則った分別収集を行うよう求めています。同法に定められた全品目を対象とする義務があるわけではなく、どの品目を分別収集の対象とするかは、市町村の作成する計画で決定されます。例えば、プラスチック製容器包装の分別収集の実施市町村数割合は75.6%、人口カバー率で83.9%(令和4年度)です。消費者には地域のルールに従った分別排出の実施をその責任として示しています。私たち消費者にも努力が求められているのです。

調べ学習

容器包装の昔と今について調べてみましょう。

手順

- ①昔の商品の容器包装はどうだったのか、身近なお年寄りに聞いてみます。(例：魚、肉、野菜、お菓子など)
- ②現代の同じものと対応する表を作ってみます。
- ③包装の必要な程度について話し合ってみましょう。

	昔	今
魚	経木(きょうぎ)/紙のように薄く削った木	プラスチックトレイ
お菓子	バラ売り・紙袋	プラスチック袋(個包装)

学年に応じた個々の美化活動が ふるさとの豊かな景観を守る

石川県津幡町立条南小学校

(環境美化教育優良校等表彰事業 第20回 食品容器環境美化協会会長賞)

県内一の規模を誇る干拓地、河北潟の近くに位置する同校では、2007年から児童が「河北潟調査隊」を結成し、多様な環境活動に取り組んでいます（写真①）。

主に5年生が総合的な学習の時間に、水質や動植物調査、農業体験などを通して河北潟の歴史や環境について学びます（写真②）。水質検査では、目立ったごみが見られなくても、水質汚染につながる測定結果が出る現実を問題視するなど、身近な環境問題に触れながら実践力や思考力を養っています。

また、同校に隣接した「中条公園」では、2、4年生が散乱ごみの回収活動を実施。公園内にある池は、用水路を通じて河北潟を行き来する魚が見られ、その調査などを行い豊かな自然を守るために自分たちができることを考え、美化活動に励みます（写真③）。それでもなくならぬごみのポイ捨てを実感した児童は、散乱防止のポスターを作成し、公民館や店などに掲示を依頼します（写真④）。

最終学年では、「親子資源回収」活動に取り組めます（写真⑤）。

資源のリサイクルを行う過程で、今まで行ってきた河北潟調査と中条公園の美化活動にどんな意義や価値があったかを振り返り、ふるさとへの愛着を育てています。



地域で励む資源回収や清掃活動が 地球規模で考える素地を養う

鹿児島県鹿児島市立西伊敷小学校

(環境美化教育優良校等表彰事業 第21回 文部科学大臣賞)

鹿児島のシンボル「桜島」を見晴らせる同校では、緑豊かなロケーションを背景に、多様な美化活動が行われています。

1974年の開校当初から地域を挙げて力を入れてきたリサイクル活動は、2007年に「学校版環境ISO認定校」に認定されてから加速（写真①）。毎月第2週目を「環境を考える週間」に設定、児童会主導でアルミ缶などの資源回収に努めています（写真②）。

その根源にあるのが「アフガニスタンの子たちへランドセルを贈ろう！」プロジェクトです。使用しなくなったランドセルを、長年にわたりアフガニスタンに贈っている同校では、6年生が総合的な学習の時間でその仕組みや意義を学んだ後、思い出の詰まったランドセルを送り出します（写真③）。アルミ缶などの回収活動で得た収益金は、そのランドセルの送料に充てています（写真④）。

こうした取組を通じ、自分たちの行う美化活動が人の役に立つことを体感した児童は、通学路清掃にも励んでいます（写真⑤）。伝統的な取組のひとつとして、毎朝7時半前後に登校、進んで清掃を行います。地域での活動をベースに、児童の環境意識はSDGsに向かい、地球規模で考える素地が整っています。

